キャンパスフレームワークプラン

平成２４年３月

国立大学法人 熊本大学

Kumamoto University

キャンパスフレームワークプラン

目　　次

１．フレームワークプランの位置づけ等
（１）フレームワークプランの背景と目的・・・・・・・ 2
（２）フレームワークプランの位置づけ・・・・・・・・ 3
（３）フレームワークプランの内容・・・・・・・・・・ 4

２．フレームワークプランの前提条件
（１）アカデミックプラン・・・・・・・・・・・・・・ 5
（２）自然環境、立地環境及び歴史的環境・・・・・・・ 6
（３）フレームワークプランを取り巻く地域計画等・・・ 8
（４）現況調査からの課題整理・・・・・・・・・・・・10
（５）アンケート調査からの課題整理・・・・・・・・・11

３．フレームワークプランにおける基本方針等
（１）フレームワークプランにおける基本方針等・・・・12
（２）各キャンパスの特徴・・・・・・・・・・・・・・13
（３）地区とエリアの関連性・・・・・・・・・・・・・13

４．フレームワークプランの概要
（１）機能強化・機能配置の基本方針・・・・・・・・・14
（２）ゾーニングの基本方針・・・・・・・・・・・・・16
（３）動線計画の基本方針・・・・・・・・・・・・・・18
（４）交通計画の基本方針・・・・・・・・・・・・・・20

本 稿 の 構 成

（策定フロー）

＊本稿では、キャンパスフレームワークプランを「フレームワークプラン」と表記する。

●条件整理

1 フレームワークプランの位置づけ等

▼

2 フレームワークプランの前提条件

- アンケート調査からの課題整理
- 現況調査からの課題整理
- フレームワークプランを取り巻く地域計画等
- 自然環境・立地環境・歴史的環境等
- アカデミックプラン

▼

●フレームワークプラン

3 フレームワークプランにおける基本方針等

▼

4 フレームワークプランの概要

- 交通計画
- 動線計画
- ゾーニング
- 機能強化・機能配置

（１）フレームワークプランの背景と目的

１）フレームワークプランの背景

熊本大学は、本学の理念・目標に基づき、長期的視点に立った計画的な整備を進めていくためにキャンパスマスタープランを策定している。このキャンパスマスタープランは主要な５つのキャンパス毎に計画としてまとめ、これを基に、施設整備はもちろん、施設の有効活用、維持管理や環境保全等の施設マネジメントを推進し、教育・研究・医療施設や学生アメニティ施設の充実を図っている。

キャンパスマスタープランの次期更新に向けて、①時代のトレンドにもとづき積極的に整備を展開することが必要な対象＝いわば柔軟性のある計画と、②保有する自然環境や歴史的資源など、今後も保存・維持し後世に引き継ぐべき対象及び継承すべき整備方針など＝いわば普遍的な骨格を明らかにすることが必要となっている。

そのため、３０年から５０年の長期的スパンで、社会の変化、多様な要求や課題に対応できる持続可能で普遍的要素を考慮したキャンパス計画の骨格・フレームについてキャンパスフレームワークプランを新たに策定し、キャンパスマスタープランを充実させるものとする。

２）フレームワークプランの目的

フレームワークプランの主な目的は以下の２点である。

①持続的なキャンパスの整備を行う過程で基準となる普遍的な「枠組み」を定める。

②キャンパスマスタープランのうち、環境計画（＝物理的な施設整備計画）における基幹的要素を定める。

（２）フレームワークプランの位置づけ

１）アカデミックプラン

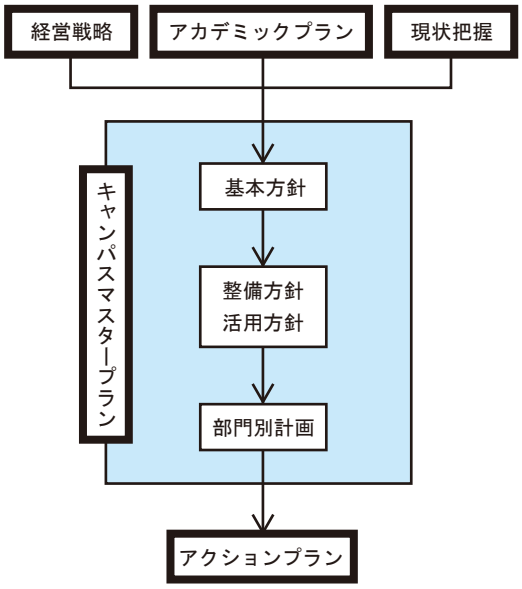
理念、目的、目標等の大学における上位計画である。

２）経営戦略

大学の理念に基づき活動する上で、重点投資など経営的視点で大学運営を方向づける指針である。

３）現状把握

各種現況調査や学生・教職員等を対象としたアンケート調査を実施している。



図．キャンパスマスタープランの位置づけ

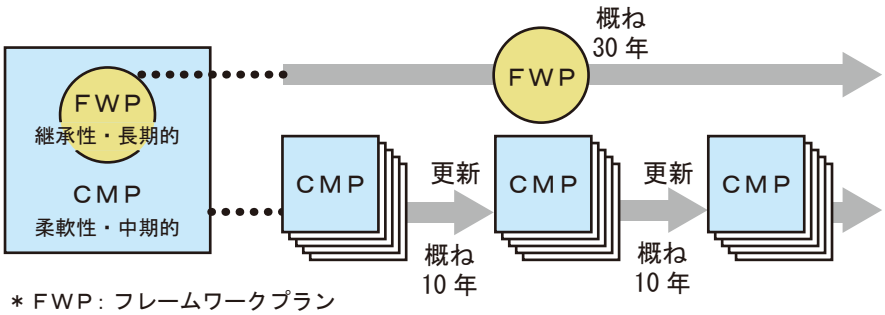
４）キャンパスマスタープラン

大学の理念・目標に基づき長期的視点に立った計画的な施設整備を進めるためのものであり、教育研究施設を中心とした総合的な機能をもつ下記の主要５キャンパスについて策定している。計画期間は概ね10年である。

黒髪キャンパス／本荘キャンパス／大江キャンパス／京町キャンパス／城東町キャンパス

５）フレームワークプランの位置づけ

フレームワークプランを、キャンパスマスタープランの一部と位置づける。柔軟性・中期的性質が求められるキャンパスマスタープランの中で、フレームワークプランは、継承性・長期的見地の役割を担い、統一性のある整備を継続するための骨格と位置づける。



＊ＦＷＰ：フレームワークプラン
＊ＣＭＰ：キャンパスマスタープラン

図．ＣＭＰとＦＷＰの関係

６）アクションプラン

『第二期中期目標・中期計画』は平成22年度から６年間を計画期間としている。同時に、第二期中期目標・中期計画の内容を、今後の活動としてより具体的に、わかりやすく示した『熊本大学アクションプラン2010』を公表している。

（３）フレームワークプランの内容

フレームワークプランは、キャンパスマスタープランに包括され、その中で取組を継承する普遍的な要素について記述する部分である。

フレームワークプランでは、全キャンパスに共通する基本方針と機能強化・機能配置、ゾーニング、動線計画、交通計画に関する普遍的な要素を定め、各キャンパス別のキャンパスマスタープランを更新する際に、変化への対応が可能な柔軟性を伴う計画を付加し計画を立案する。

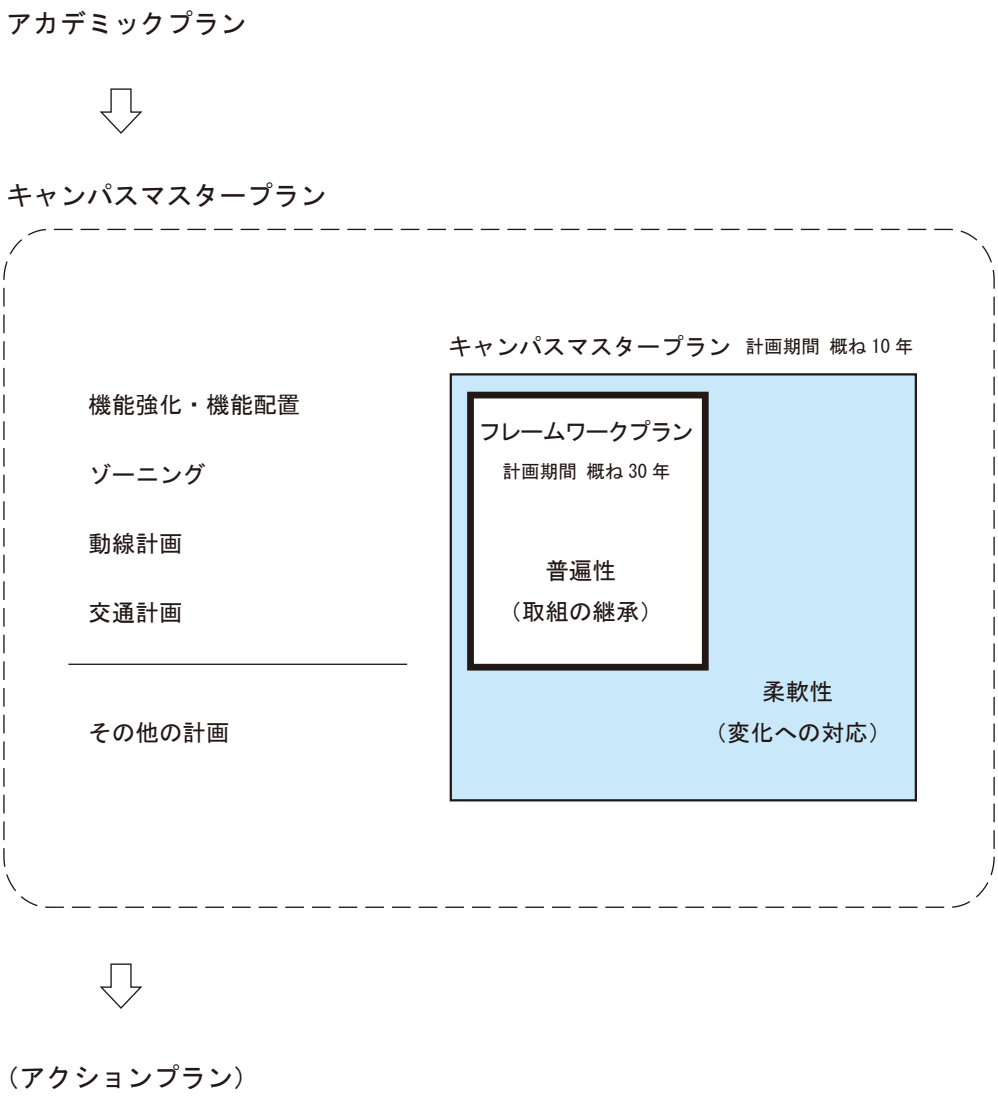


図. フレームワークプランの内容のイメージ

2 フレームワークプランの前提条件

（1）アカデミックプラン （フレームワークプランの上位計画）

熊本大学は、理念、目的、目標等の設定において「教育」「研究」「地域貢献」「国際貢献」の４項目を軸に展開しており、人材育成を通して持続発展する社会に寄与するために、歴史・伝統の蓄積と最先端の高度な環境を活かし、地域性と国際化のバランスを満たした研究拠点キャンパスの形成を目指している。

— 理　念 —

本学は、教育基本法及び学校教育法の精神に則り、総合大学として、知の創造、継承、発展に努め、知的、道徳的及び応用能力を備えた人材を育成することにより、地域と国際社会に貢献することを目的とする。

— 目　的 —

教　育

個性ある創造的人材を育成するために、学部から大学院まで一貫した理念のもとに総合的な教育を行う。

学部では、幅広く深い教養、国際的対話力、情報化への対応能力及び主体的な課題探求能力を備えた人材を育成する。

大学院では、学部教育を基盤に、人間と自然への深い洞察に基づく総合的判断力と国際的に通用する専門知識・技能とを身につけた高度専門職業人を育成する。

また、社会に開かれた大学として、生涯を通じた学習の場を積極的に提供する。

研　究

高度な学術研究の中核としての機能を高め、最先端の創造的な学術研究を積極的に推進するとともに、人類の文化遺産の豊かな継承・発展に努める。

また、総合大学の特徴を活かして、人間、社会、自然の諸科学を総合的に深化させ、学際的な研究を推進することにより、人間と環境の共生及び社会の持続可能な発展に寄与する。

地域貢献・国際貢献

地方中核都市に位置する国立大学として地域との連携を強め、地域における研究中枢的機能及び指導的人材の養成機能を果たす。世界に開かれた情報拠点として、世界に向けた学術文化の発信に努めることにより、地域の産業の振興と文化の向上に寄与する。

また、知的国際交流を積極的に推進するとともに留学生教育に努め、双方向的な国際交流の担い手の育成を目指す。

— 目　標 —

地域に根ざし、グローバルに展開する未来志向の研究拠点大学

— 運営方針 —

・学問の自由、大学の自治の理念をふまえた自主性、自律性、公明性の確保
・教育研究の長期性や社会と大学の持続発展の視点の重視
・「将来像」、「目標・計画」の堅持と確実な実現
・学生とその活動の尊重と手厚い支援
・教育の機会均等、基礎研究、先端医療、地域医療など競争や経営になじまない部分の重視と堅持
・構成員の創意と構成員間のビジョン・目標・情報の共有に基づく戦略的トップマネジメントと教員・職員の一体的協働
・教職員の意識、意欲、能力、豊かな人間性、夢を醸成する条件整備

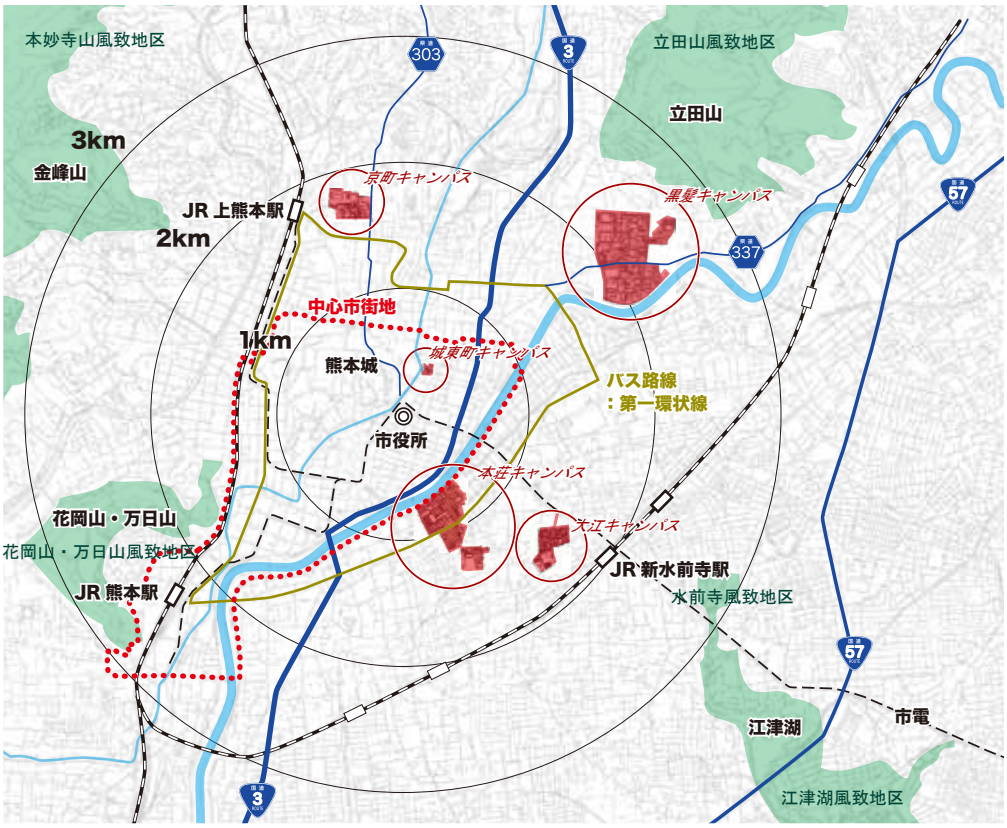
（２）自然環境、立地環境及び歴史的環境

１）自然環境

５つのキャンパスは、金峰山、立田山、水前寺・江津湖、花岡山・万日山のそれぞれの風致地区に囲まれる範囲にある。黒髪キャンパスは北の立田山と南の白川（一級河川）に挟まれ、本荘キャンパスと大江キャンパスは白川の南に位置し、敷地内や隣接道路には白川から引かれた疎水（井出）が走っている。京町キャンパスは熊本城から北に続く京町台地の西斜面の上に位置し、キャンパスの西側に金峰山の山並みを望むことができる。城東町キャンパスは熊本城・坪井川の左岸に位置する。

２）立地環境

黒髪キャンパスは、北キャンパスと南キャンパスの間を県道337号（旧国道５７号／平成6年移管）が走り、北に立田山自然公園が近接している。本荘キャンパスは、白川を挟み中心市街地に隣接し、隣地は商業地域と第二種住居地域に隣接しており、バス路線の第一環状線が通っている。大江キャンパスは、JR新水前寺駅と市電ルートに近接しており第二種住居地域に立地している。京町キャンパスは、近接するJR上熊本駅とバス路線の第一環状線で結ばれ、県道303号（旧国道３号／昭和44年移管）を通るバス路線も多い。城東町キャンパスは、熊本城域に近接し中心市街地内の商業地域に立地している。

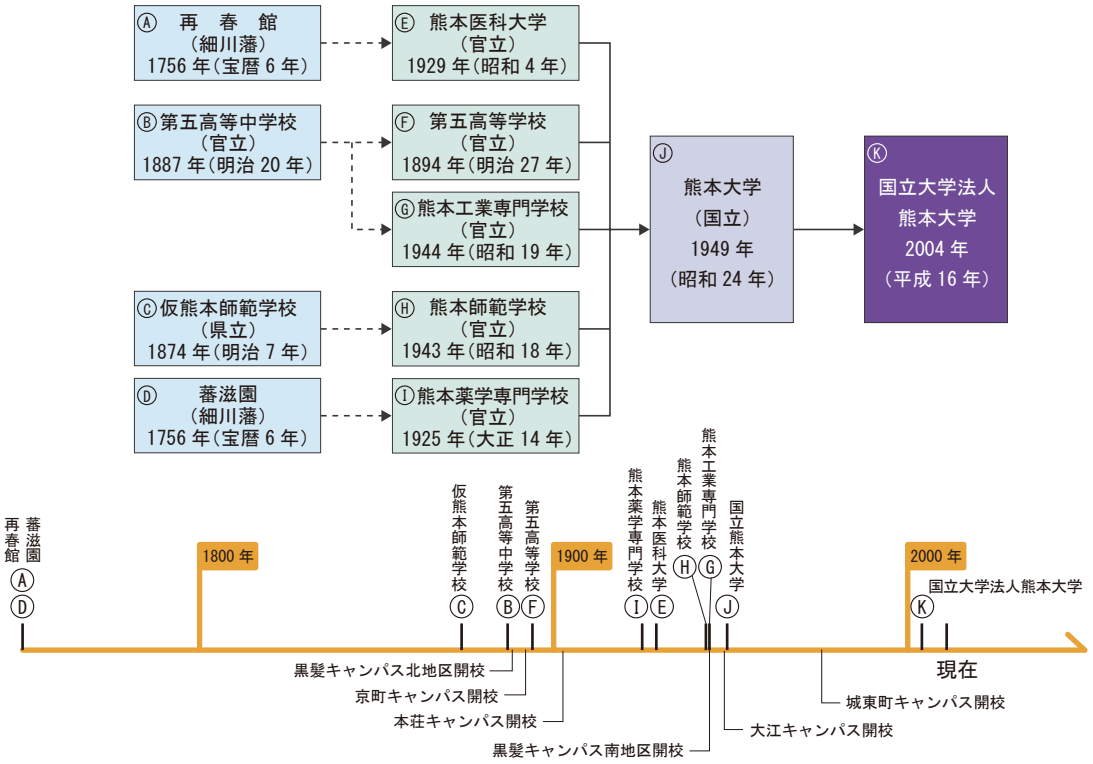


図．キャンパスの位置

３）歴史的環境

①再春館から 250 余年、五高から 120 余年の歴史と伝統を持つ

熊本大学は、1756（宝暦6）年に開かれた、日本最初の官立医療施設である細川藩の再春館や薬用植物園としての蕃滋園（ばんじえん）を源流とする医学部・薬学部、1887（明治20）年開設の第五高等学校の流れをくむ文・法・理・工学部、1874（明治7）年開設の県立仮熊本師範学校に始まる教育学部等で構成され、東京大学に並ぶ歴史と伝統のある大学である。



図．熊本大学の沿革

②歴史的資源等

表. 主な歴史的資源等一覧

	黒髪キャンパス	本荘キャンパス	大江キャンパス	京町キャンパス	城東町キャンパス
国重要文化財	赤門／北 五高記念館／北 化学実験場／北 工学部研究資料館／南				
登録有形文化財	事務局本館／南	山崎記念館／北			
記念館等	工学部百周年記念館／南 ルポゼ（旧標本室）／南	肥後医育記念館／中	宮本記念館 熊薬ミュージアム		
緑	槇、楠、桜並木／北 銀杏並木、楠／南	かいのき／北 楠／北	薬用植物園 楠	楓	楠
記念碑等	中門／北 サインカーブ／北 龍南健児の像／北 ラフカディオハーンの碑レリーフ／北 薬園由来の碑／北 黒本植の碑／北 第五高等学校跡の碑／北 習学寮跡の碑／北 行幸記念碑／北 夏目漱石の碑銅像句碑／北 「武夫原」の歌碑／北	解剖慰霊碑／北 谷口長雄先生像／中 実験動物慰霊碑／中	行幸記念碑	行幸記念碑	

（３）フレームワークプランを取り巻く地域計画等

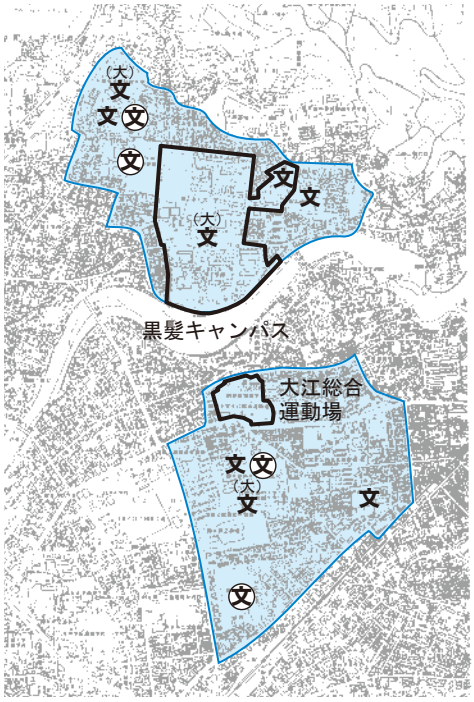
１）都市計画等

５つのキャンパスの都市計画等の内容を下表に示す。

キャンパス	黒髪キャンパス	本荘キャンパス	大江キャンパス	京町キャンパス	城東町キャンパス
敷地面積	311,478㎡	135,815㎡	53,352㎡	51,547㎡	4,632㎡
	北地区 196,478㎡ 南地区 115,000㎡	北地区 84,966㎡ 中地区 25,088㎡ 南地区 25,761㎡	北地区 34,115㎡ 南地区 19,237㎡		
区域区分	市街化区域	市街化区域	市街化区域	市街化区域	市街化区域
地域地区	特定防災街区整備地区	準防火地域	準防火地域	準防火地域	準防火地域
	文教地区				駐車場整備地区
用途地域	第一種中高層住居専用地域	第二種住居地域	第二種住居地域	第二種中高層住居専用地域	商業地域
	第二種中高層住居専用地域	近隣商業地域	近隣商業地域	近隣商業地域	
		商業地域	商業地域		
熊本市景観条例における重点地域	**白川沿岸地域（河川区域から20m）**	**白川沿岸地域（河川区域から20m）**	―	熊本城周辺地域内の京町台地区	熊本城周辺地域内の一般地区
熊本市屋外広告物条例	学校の建造物及びその敷地は、屋外広告物第三種禁止地域に該当する。				

文教地区

昭和37年に特別用途地区の一つとして指定された文教地区172haには、本学黒髪キャンパスを含む大学３校、高校４校、中学３校、小学１校、特別支援学校１校がある。



文　小中学校
(文)　高等学校
(大)文　大学

図．文教地区

２）熊本都市圏における役割

①「学都熊本」の中核を担う

熊本市内の８大学と１短大の学生数28,381人のうち、熊本大学の学生数は10,487人で全体の37.0%を占める（平成22年度版熊本市統計書　平成22年5月1日現在）。

②高度先進医療の実践

熊本大学医学部附属病院は、特定機能病院として高度で先進的な医療の研究開発及びその診療への応用実践を推進している。

図. 熊本市内の大学と総合病院（100 床以上）の分布

③熊本市との包括連携協定

平成19年に締結された熊本市との包括連携協定に基づき、政策創造研究教育センターとの共同研究や、並木坂に開設した工学部まちなか工房の活動、教育学部の学生を家庭に派遣するユアフレンド事業等、地域と連動した取組を行っている。

④高等教育コンソーシアム熊本

県内の高等教育機関14校を正会員とし、特別会員として熊本県、熊本市、及び賛助会員７団体、協賛会員が協力して、地域社会の教育・文化の向上・発展に貢献している。

⑤くまもと都市戦略会議

平成22年に熊本県、熊本市、熊本大学の三者で、地域の課題や将来のビジョンについて協議する場として「くまもと都市戦略会議」が発足し、「コンベンション機能の充実」「学生のまちづくり」「魅力ある中心市街地の形成」等について熊本都市圏の政策を牽引する。

（４）現況調査からの課題整理

各種現況調査からフレームワークプランに反映させるべき課題を整理する。

１）キャンパス利用者数の状況より

全学（黒髪、本荘、大江、京町、城東町キャンパス）の学生・教職員数の合計は2011年5月現在で約12,300人であり、大きな変動はないものと仮定し、現状の許容力を維持したキャンパス機能の強化・拡充が求められている。

２）建物の老朽化状況、建物の耐震化状況より

新築・改修による建物機能の更新は黒髪キャンパスと本荘キャンパスの計画分で一応の整備を完了する。主な整備手法は改善・補修等に移行し、今後も計画的に進める必要がある。

耐震改修については、緊急性や予算等を勘案しながら、今後も計画的整備が望まれる。

３）構内駐車場・駐輪場の設置状況より

駐車場については、規模・配置の適正化が求められている。附属病院がある本荘北キャンパスにおいては、外来者用の駐車スペースの確保等への対応が必要とされている。

駐輪場は、適正規模を維持するために長期駐輪の整理や撤去のルールづくり等により有効スペースを確保すること、適正配置を維持するために小規模分散配置できめ細やかな対応が望まれている。

４）交通標識・誘導サインの設置状況より

サインの現状は老朽化・陳腐化の傾向にあり、統一性に欠ける。ガイドラインの策定が求められる。

５）緑地の状況より

保存樹木を指定し維持・管理することが望まれる。

オープンスペースが必ずしも効果的に機能していないため、オープンスペースと緑化手法を適切に組み合わせることが必要である。

６）設備の状況より

設備の現状は、老朽化・陳腐化の傾向にあり計画的な更新が必要である。

地球環境に優しいエネルギーへの転換を図ることが求められる。

（５）アンケート調査からの課題整理

学内のアンケート調査からフレームワークプランに反映させるべき課題を整理する。

１）「好きな場所」

・場所としては、五高及びその周辺への回答が最も多く、赤門から五高までのサインカーブ及びその周辺への回答とあわせて多くの支持を得ている。
・総じて、個人的に好きな場所という主観的な問いに対しては、象徴的な並木や大木から、私だけが知っている小さな季節感まで、「緑」に起因するところが大きい。
・歴史的な建物や新しい建物についても、例えば「木々の間から垣間見える赤レンガ建築」「工学部百周年記念館のガラスに映る銀杏」など、「緑」や「自然環境」とセットで「好きな場所」として捉える傾向がある。
・本荘キャンパスは中地区の中庭への回答、大江キャンパスは薬用植物園への回答が最も多かった。
・自然環境を活かし、自然環境に調和させる景観形成の実現が課題である。

２）「象徴的な場所」

・大学を代表する空間という客観的な問いに対しては、圧倒的に「五高記念館」である（全体の44%）。
・五高記念館に続く回答群は、赤門（12%）、工学部百周年記念館（7%）、木々・並木（7%）、事務局本館（6%）である。
・上位３項目は、「五高記念館」―「赤門」―「工学部百周年記念館」の軸線が浮かびあがり、シンボリックな空間として整備を行う。
・化学実験場や資料館等の古い建物と、附属病院や高層棟等の新しい建物の記述もある。

３）「今後のキャンパス整備について考慮してほしいこと」

・大項目でみると「交通」への意見が最も多く、細項目の回答が多岐にわたる中で、「駐車場」「駐輪場」「道路・路面」に関連した要望が一群として突出しているため、優先的検討課題と位置づけ対処する。
・次いで大項目では「施設整備」が多く、細項目は多岐にわたり、教育研究施設の充実を図る。
・上記項目と差はあるものの「安心安全・災害対応」と「開かれたキャンパス」に関連する回答が次点に続いている。

４）「長期展望における重要事項」

・全28項目のうち100票を超えた上位6項目を以下に示す。

1位：キャンパスの歴史・文化・緑化要素によるシンボルゾーンの形成（129票）／2位：案内板の多言語表記など、国際化に対応した支援環境の整備（125票）／3位：リフレッシュスペースや交流空間の確保（123票）／4位：アメニティ豊かなオープンスペース（外部の休憩空間・緑空間）の整備（118票）／5位：歩車道分離・歩行者専用空間の整備（104票）／6位：建物内外空間のユニバーサルデザイン化とバリアフリー化（103票）

アンケートから導かれるキャンパス整備のイメージを以下に示す。

> 歴史・文化・自然に彩られたシンボリックで風格のある空間と、緑地などの豊かなオープンスペースを有した心地よい歩行者空間が広がり、キャンパス全体は国際化やユニバーサルデザインに対応した質の高い環境が整っている。

（1）フレームワークプランにおける基本方針等

― 目標像 ―

地域に根ざし、グローバルに展開する未来志向の研究拠点大学

― 基本方針 ―

未来志向の学術研究拠点形成のための基盤づくり

未来を生き抜くプロフェッショナルの養成と国際的に卓越した先導的研究を支える機能強化、施設・環境の整備により拠点形成を推進する基盤づくりを行う。

学都熊本を牽引する個性と創造性あるキャンパス形成

個性と創造性ある教育と交流のためのキャンパス空間の整備と、蓄積された歴史及び文化遺産の知的価値の創造と活用を推進し「学都熊本」を牽引する。

サスティナブル社会のモデルとなるキャンパス機能強化

エコキャンパスの構築と様々な環境対策の実験的取組を通してサスティナブルな社会のモデルとなるようなキャンパス内の機能強化を図る。

― 整備方針 ―

整備方針をFICSS 5（フィクス・ファイブ）として設定する。

① **Flexibility**［変化への柔軟性］

○高度化・多様化する教育研究活動に対応する機能の拡充

○利用者ニーズへの対応と共同利用を促す既存施設の有効活用

② **Identity**［個性あるキャンパス環境の創造］

○自然環境と歴史的資源を活かしたシンボリックな景観の形成

○歴史あるものと新しいものが調和した心地よい環境の創出

③ **Community**［未来志向の教育研究を創出する交流の促進］

○学部や大学の枠を超えた学内外交流の場の創出

○留学生等外国人との交流を促すキャンパスの国際化への対応

④ **Safety**［安全・安心な環境の確保］

○防災、治安等キャンパスの基礎的な安全の確保

○情報セキュリティの管理や実験・実習等の教育研究環境における安全の確保

⑤ **Sustainability**［持続的な発展可能性］

○ライフサイクルコストの低減や社会実験等の取組による環境対策の推進

○自然エネルギーへの転換や省エネ等による地球環境への配慮

（２）各キャンパスの特徴

黒髪キャンパス

明治20年第五高等中学校の開校当時からの北地区と、明治39年熊本工業高等学校の開校当時からの南地区で構成される。重要文化財建造物が点在し、歴史と自然が残るキャンパスである。

メインキャンパスとして、文学系、法学系、教育学系、理学系、工学系で構成される教育研究機能と、全学の事務局機能、教育学部附属特別支援学校等で構成する。

本荘キャンパス

明治34年私立熊本医学校の附属病院として現地に移転立地したことに始まる。昭和20年に戦災で二の丸に移転するが、昭和39年の附属病院中央診療棟を皮切りに随時本荘地区へ移転帰還した。

医学系、附属病院、生命科学系先端研究センターで構成する。

大江キャンパス

私立九州薬学校が山崎町より現在の大江地区に移転したことに始まり、昭和24年の国立大学への移行の際に熊本大学薬学部として包括された。

薬学系で構成され、薬用植物園を併設する。

京町キャンパス

明治26年に熊本県尋常師範学校として現在地へ移転以降、官立熊本師範学校等を経て昭和24年に熊本大学の所管となり昭和26年に熊本大学教育学部附属小学校・中学校となった。

教育学部附属小学校・中学校で構成する。

城東町キャンパス

昭和期の熊本市立壺川幼稚園、熊本市立千葉城幼稚園、その後の各師範学校の附属幼稚園を経て、昭和26年に熊本大学教育学部附属幼稚園となる。昭和46年に現在の用地を取得し移設した。

教育学部附属幼稚園で構成する。

（３）地区とエリアの関連性

キャンパス毎あるいはキャンパスの地区（公共道路で分断された一団の敷地）毎に、学部系、附属病院、附属学校等のエリアを設定する。将来的に機能の転地が必要になった場合は、キャンパス内での入れ替えを優先し、次に地区内、エリアの入れ替えを検討する。但し、附属学校はそれ自体が特殊な機能であり、かつセキュリティの問題もあり、本来の「キャンパス」整備とは意味が異なるため、独自の検討を行う。

（１）機能強化・機能配置の基本方針

１）機能強化・機能配置基本方針の目的

上位計画からの要請を整理し、空間計画に反映させるために標記基本方針を設定する。

２）機能強化の基本方針

①教育研究環境の質の向上

教育研究内容が多様化・高度化する過程で機能の拡充を図る。但し、需要面積の拡大が必要になった場合は、既存施設の共同利用の促進や新規需要の重要性・優先順位等を十分に検討し対処する。

②熊本大学としての個性の喚起

学内アンケートでは、大木や並木への意識が高く、歴史的資源とあわせた環境づくりで個性化を図る。

③市民に開かれた大学

パブリックスペースは交流や休息の場として機能する重要な空間である。まず、交流ゾーンを明確に分けることが重要であり配置に留意する。

３）機能配置の基本方針

①学部ごとの個性の喚起と機能の連続性

学部系の機能を集約し個性化を図る。エリア（学部系）が隣接する場合は、同種機能（講義棟群や実験・実習棟群）の連続性や、機能拡充に資する施設の共同利用に配慮し配置する。

②歴史的資源や緑地等の保存計画

保存する建物や樹木を指定する。機能転換によりやむを得ない場合は、山崎記念館の事例を参考に曳き家等の代替案を検討し残留策を講じる。

③パブリックスペースの確保

交流ゾーンにおけるパブリックスペースに加えて、教育・研究ゾーンにおける学生専用のオープンスペースや施設内コミュニティスペースを確保・整備する。

４）機能強化・機能配置に関する補足説明

①安全性の向上

・建物の耐震性の確保は重要かつ緊急性のある課題であり、計画的に対応する。

・実験棟における危険物取扱等への対策。

②ビジター向け機能の付加

・「開かれた大学」を推進する地域交流、国際交流を促進する。ビジターセンター、喫茶、ホール、インフォメーション、宿泊施設等の諸機能を強化する。

③治安の向上

・開かれた大学を目指し、キャンパスの一部を開放する一方で、防犯対策を講じる必要がある。セキュリティ機能や夜間照明、待避場所の確保等。

④附属病院、附属学校の対応

・特殊事情に対応した機能強化が求められるため、個別対応が必要である。

⑤グラウンド等の利用

・グラウンド等は、福利厚生施設として日常的に利用する重要な機能であり原則転用は行わない。あわせて、次期建て替え計画時には建設予備地として機能させる。

⑥駐車場の確保

・学内駐車場許可基準の適正化を図った上で、駐車場を集約的に配置する。

⑦キャンパスの市民開放

・交流ゾーンは、「散歩」という精神性の確保に留意する。

・一般開放する施設を教育・研究ゾーンに配置する場合は、交流ゾーンに隣接させるか、教育・研究ゾーンの主要動線沿線に配置する。

⑧災害時等の対応

・災害時における危機管理に対する施設・設備の整備と防火・災害対応体制の確立を図る。

（２）ゾーニングの基本方針

１）ゾーニングの目的

長期にわたる施設更新の過程で、キャンパスとしての機能と個性を失わないようにする。特に、以下の３つの視点による個性化が重要である。

・「学問の府、研究の場、教育の場」というコンセプトを維持する。
・わかりやすい、行きやすい、回遊しやすい空間としての機能を維持する。
・親しみやすく、くつろげる空間としての景観を維持する。

２）ゾーンの設定

機能強化、機能配置に関する基本方針から、大学の中枢である［教育・研究ゾーン］、開かれた大学を体現する［交流ゾーン］、及びそれらの施設運営をサポートする［管理ゾーン］の３つの【大ゾーン】に大別する。

さらに、それら３つのゾーン内にある主要施設の利用形態を加味して【中ゾーン】を設定する。

３）ゾーニングの方針

①機能の独立性の保持

ゾーン内での建て替えや更新が可能なように、一定の空地をとりながら、ゾーンごとの独立性を保持する。

教育・研究ゾーンへの部外者の無秩序な進入を抑制し、落ち着きのある良質な教育研究環境を保持する。

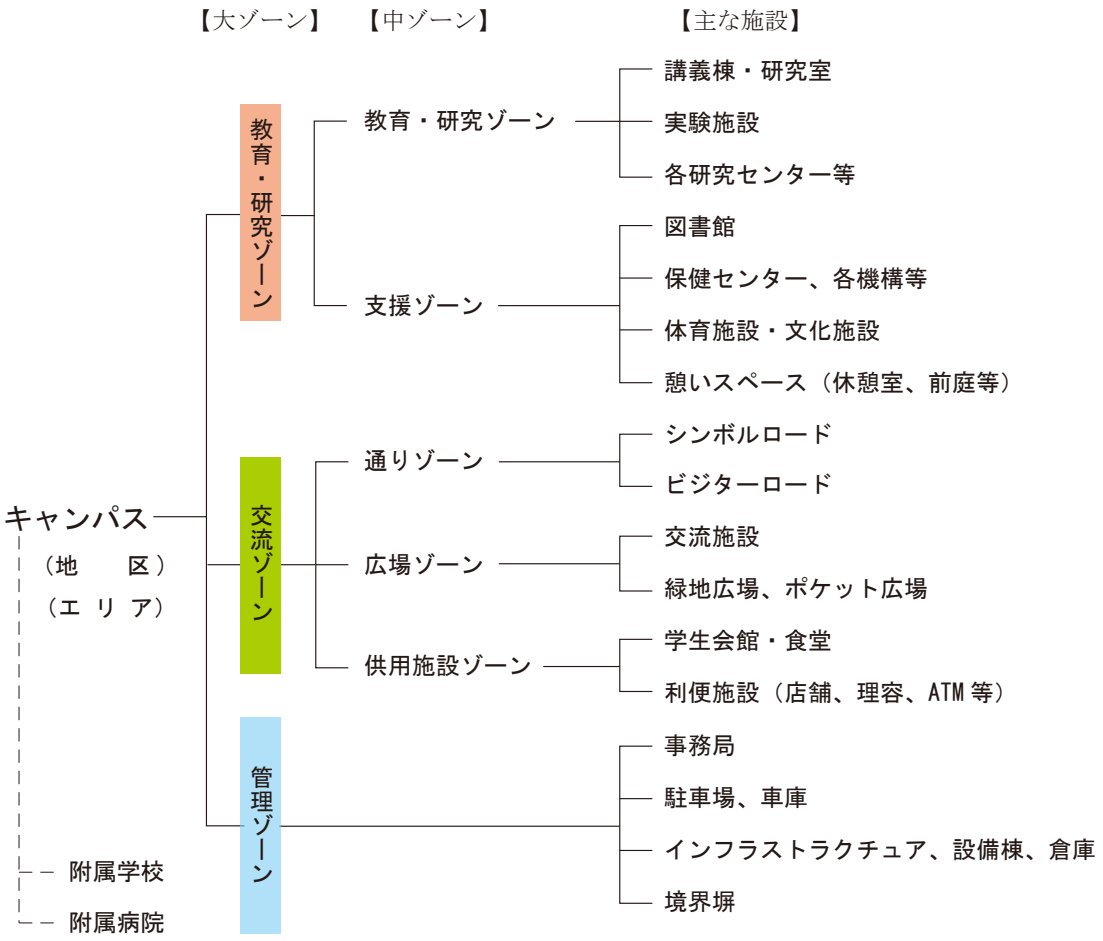
②機能連携の強化

教育・研究ゾーンの独立性を保ちながら、附属施設や交流施設との連携が図りやすい隣接性を確保する。

また、管理ゾーンのサービス接続性を確保する。

③施設利用者への快適性の確保

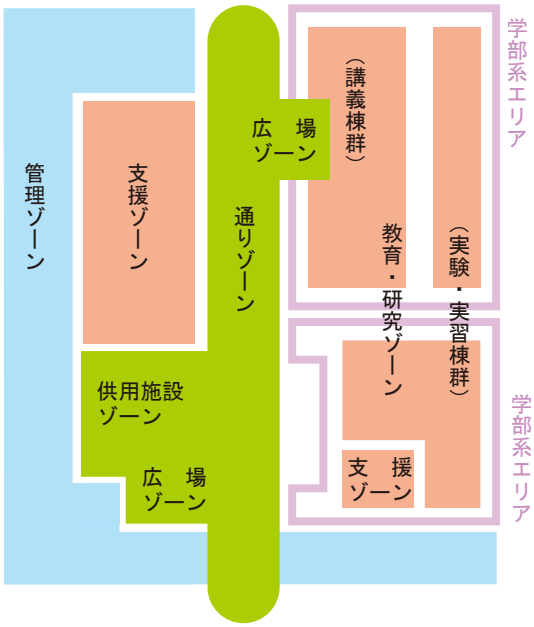
交流ゾーンを中央に配置することで、キャンパス全体の空間イメージをわかりやすくし、他ゾーンとの接点を円滑にすることで利用者の快適性を確保する。また、交流ゾーンは、市民生活の向上に寄与し、地域と調和した空間として利用に供する。



図．ゾーン構成

4）ゾーニングに関する補足説明

- 広場ゾーンの中に、喫茶、レストラン、歴史記念館等の交流施設を置く。
- 交流ゾーンは、歴史的観光資源や供用施設等を包含もしくは隣接させるように設定する。
- 交流ゾーンから教育・研究ゾーンへの空間の接続性を確保しながら、進入の抑制装置（空間の変化、仕上げ材の変化等）を施す。
- 管理ゾーンは、各ゾーンへのサービスの容易さとキャンパス内外の出入り管理という観点から配置する。



図．ゾーニング概要

（３）動線計画の基本方針

（交通に関連する動線は次節の交通計画で扱う）

１）動線計画の目的

機能的にネットワークされた動線計画により、わかりやすく効率的な移動を可能とし、歩行者にとって安全・快適な環境を実現する。

また、動線上のシークエンス（連続的な場面の転換）を景観計画の中に取り込むことで、キャンパス生活の中に物語性を創出する。

２）主要動線の設定

３つの【大ゾーン】に則して、主要動線を設定する。

①学生等動線

学生及び教職員が教育や研究のために移動するための動線。公開講座やシンポジウム、共同研究等のために訪れる学外からの来訪者の動線を含む。

教育・研究ゾーンにおける、学生等の効率的な移動や夜間の安全性を確保するための主軸を主要動線と位置づける。

②市民等動線

一般市民や観光訪問客の動線。学生等の動線と重複する部分を含む。

沿線の広場と一体的に交流ゾーンを形成している通りを主要動線として位置づける。

③管理等動線

駐車場を利用したり、搬出入のための動線。

ゲートからメイン駐車場までの動線を主要動線とする。

３）動線計画の方針

①主要動線

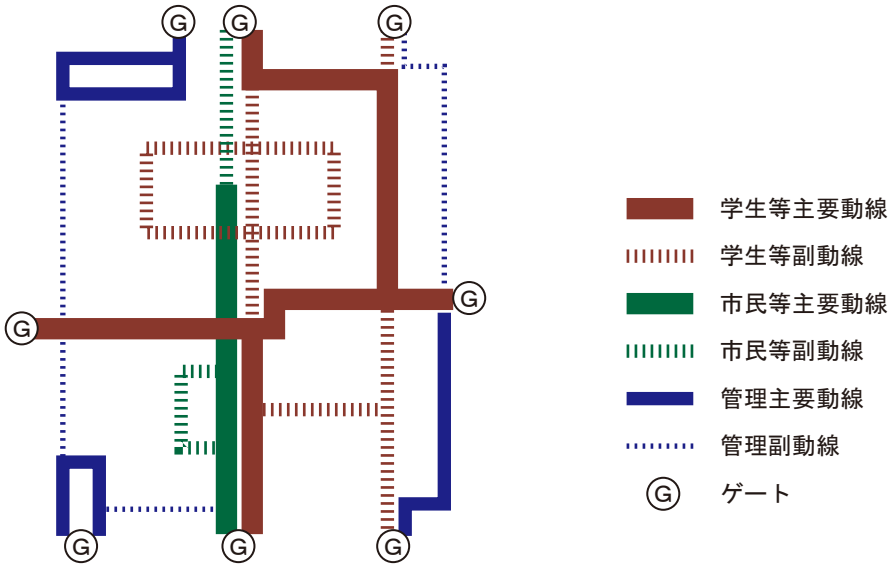
異なる種別の動線が重なる場合、同種の動線が多く（太く）重なる場合、主要施設と附属施設間での往来が多い場合の動線を主要動線と位置づけ、各ゾーンの中央を貫通するように配置する。

②副動線

主要動線は人の通行量や車の交通量が多く、それに対し教育・研究ゾーンの実験棟への動線、交流ゾーンのパスやゾーン間をつなぐパスの役割のある動線、管理ゾーンの搬出入のための動線は主要動線に比べ動線が細く副動線と位置づけられ、ゾーン間やゾーン縁辺部に配置する。

③ゲートの位置づけと管理

ゲートは、キャンパスに導く玄関口の役割とセキュリティ確保のための役割があり、歩行者動線と交通動線の関係や時間規制のルール等を考慮し設置する。



図．動線の概要

4）動線計画に関する補足説明

①避難動線について

様々な災害に対する適切な避難誘導のための動線を事前に想定し、掲示やオリエンテーション等によって、施設利用者への周知徹底を図る。建物内避難経路に加え、屋外における避難場所までの誘導動線についても想定する。

②セキュリティについて

時間外の動線や部外者の動線等に配慮し、建物のセキュリティを確保する。教育・研究ゾーンへの進入については、ゾーニング計画の項にあるように、抑制装置（空間の変化、仕上げ材の変化等）を施すことで対応する。

③ゲートの設置について

集客性の高い施設の配置次第で動線が長くなる状況が生じた場合は、学生等の施設までのアクセシビリティに考慮し、ゲートの配置を検討する。

（4）交通計画の基本方針

1）交通計画の目的

車両を含めて動線計画を補完しつつ、交通システムを構築し、静穏で安全・安心な構内交通環境を確保する。

また、秩序ある駐車場・駐輪場利用と利便性の向上を図り、良好な景観形成に寄与する。

2）交通計画の指針

①安全な歩行者空間の確保

・自動車の入構規制を行う。

・駐車場・バイク置き場は構内入り口付近に配置する。

・建物群の外周にループ道路を設け、キャンパス中央への乗り入れを制限する。

②快適で静穏な教育研究環境の確保

・緑地への駐車を規制する。

・駐輪場は歩行者にとっての利便性・快適性に配慮した配置計画とする。

③ユニバーサルデザインを導入したサインの設置

・交通標識・サインは、デザインの統一化を図る。

・国際性に配慮し、複数の外国語表記とする。

・ピクトグラムを用い明瞭なデザインとする。

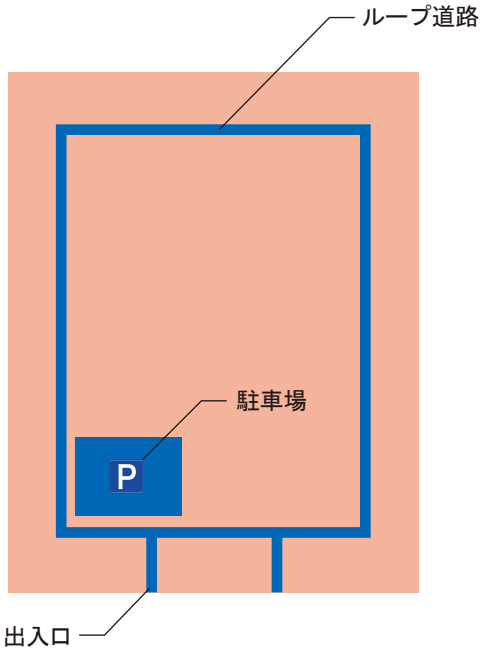
④環境に配慮した交通計画の策定

・自動車の抑制の施策に取り組む。

・舗装面の整備は再生材料を採用し、透水化を図る。

⑤各キャンパスの特性に応じた交通計画の策定

・構内交通計画は、キャンパス毎の特性に応じた内容を策定する。



図．自動車動線の概念図

キャンパスフレームワークプラン

平成２４年３月

国立大学法人 熊本大学
施設・環境委員会策定
キャンパス整備ワーキング作成

http://www-cms.jimu.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/shisetu/fwplan

キャンパスフレームワークプラン

平成24年3月

国立大学法人 熊本大学